

後継者の有無による農家別指導方法の検討

紀南家畜保健衛生所
○宮本泰成 柏木敏孝

【背景および目的】

全国的にも畜産農家の高齢化は深刻で、管内の牛飼養農家も例外ではなく60歳以上の割合が約63%と半数以上、65歳以上で見ても約44%と半数近くを占めている（図1）。このような高齢化に伴い後継者に関する問題が出てくるが、後継者がいない高齢農家では自身の健康状態や管理状況を見ながら廃業も見据える必要がある。また後継者がいる農家では早期の技術伝達に加え、現状の問題点を引き継がせないよう解決しておく必要がある。そこで今回牛飼養農家のここ最近の管理状況を調査し、後継者の有無別に指導方法を検討した。

【調査内容】

調査農家は管内牛飼養農家15戸のうち高齢で後継者がいないことが確定しているA農家、繁殖雌牛飼養、84歳、作業者は畜主、妻、娘の3名、将来後継することが確定しているB農家、乳肉複合、作業者は畜主、後継者の父、後継者の3名、またB農家は繁殖雌牛の管理を後継者中心で行っているため、今回の調査は繁殖雌牛のみを対象とした。さらにH27年後継済のC農家、繁殖雌牛飼養、作業者は畜主のみの計3戸を選定し、H25～H29年10月末までの飼養頭数の推移、牛群の構成年齢、母牛の血統、各種繁殖成績、繁殖、子牛診療回数、子牛価格等について調査した。なお、母牛の血統は一代祖を調査しており、種雄牛の生年月日をもとにH16年以降に生まれたものをA（新）、H10年からH15年をB、H10年以前をC（古）としている。

【調査結果】

A農家では飼養頭数はH25:37頭→H29:23頭と年々減少しており、更新もしばらく行っていないことから牛群の構成年齢も10歳以上が83%と大半を占め、それに伴い血統も古いものが多かった（図2、3、4）。繁殖成績については分娩間隔、空胎日数、分娩頭数それぞれH25:403.1日→H28:454.4日、H25:110.9日→H28:173.7日、H25:27頭→H28:18頭と年々悪化しており、繁殖、子牛診療回数もH25:36回→H28:43回と増加していた（図5、6、7、8）。また子牛価格については調査期間を通して概ね県内平均より低かった（図9）。

B農家では更新、淘汰により飼養頭数はH25:16頭、H27:18頭、H29:17頭と増減に波が見られたが、牛群の構成年齢は2歳未満が約41%と最も多く、すべて10歳未満の牛で構成されており、血統も新しいものが多かった（図10、11、12）。繁殖成績についてはH26年は良好であったが、分娩間隔H26:376.4日→H28:436.8日、空胎日数H26:87.8日→H28:147.7日、分娩頭数H26:15頭→H28:12頭と年々悪

化しており、繁殖、子牛診療回数もH25:12回→H28:25回と増加していた（図13、14、15、16）。子牛価格についてはA農家同様、県内平均より低かった（図17）。

C農家では、後継後保留により飼養頭数はH25:18頭→H29:24頭と増加しており、未経産牛も増えてきているが、8歳以上特に10歳以上の牛が約38%ともっとも多く、血統も古いものが約54%と半数以上を占めていた（図18、19、20）。繁殖成績は後継当初は悪かったが、分娩間隔H27:441.7日→H28:367.4日、空胎日数H27:168.4日→H28:79.9日、分娩頭数H27:18頭→H28:21頭と改善傾向で、診療回数も減少していたが、H29年は繁殖、子牛診療回数はH28:16回→23回と増加していた（図21、22、23）。子牛価格は他同様県内平均より低かった（図25）。

【指導方法の検討】

A農家では畜主の年齢、健康状態の悪化により、年々管理状況は悪化している。畜主も自身の将来性を考えてはいるが、現時点では経営の継続を希望し、その意欲も高い。しかし現在の飼養規模での作業量を十分にこなせていないのが現状である。経営の継続を希望していることから廃業は見据えつつも、現状より管理状況を改善するような指導、具体的には計画的な飼養頭数の減少や飼養範囲の縮小を重点的に実施し、さらにはヒートマウントディテクター等も活用することでその都度管理できる頭数を模索するような指導が必要と考えられた。指導の途中経過であるが、畜主が分娩間隔や空胎日数を考慮せず、いつか受胎すればいいと考えているので指導は難航したが、長期不受胎牛を中心に4頭を廃用とし、H29年度内にさらに3頭の廃用を予定している。

B農家では管理不足等により管理状況は年々悪化している。後継者への技術伝達不足に加え、乳牛部門特に配乳業務での収益が高く経済的余裕があることから、繁殖雌牛の管理、子牛育成に対する向上心が低いのではないかと推察した。一方で調査結果でも示したが、血統には関心、興味が強く、牛群の更新も積極的に行っている。このことから繁殖管理や子牛育成に対し如何に関心、興味を持たせるかに焦点を当てた指導、具体的には技術面での指導に加え、各種成績の提示、優良農家との比較、牧場巡回や勉強会への参加の励行等により危機感や刺激を与える指導が必要と考えられた。指導の途中経過であるが子牛の育成方法に一部改善がみられ、またH29年度に開催された牧場巡回、勉強会への出席率は100%となった。

C農家では経営が順調になってきていたが、H29年度は10歳以上の牛への繁殖治療、多忙による管理不備のため子牛の診療回数が増加した。本来は後継する予定ではなく、急きょ引継ぎもなく後継したことから自分のやり方が正解なの不安になり、モチベーションの維

持が難しいとの声も聞かれた。後継して間もないことから飼養管理指導の再徹底、継続に加え、モチベーションを上げる指導、具体的には管理状況を反映する代謝プロファイルテスト（MPT）やボディコンディション（BCS）測定、各種成績の提示や勉強会等の開催を重点的に実施し、加えて10歳以上の牛の計画的な更新等の指導が必要と考えられた。指導の途中経過であるが、飼養管理の再徹底により子牛の診療回数は0に、MPT、BCS測定の実施により現在の管理状況を把握、改良への意識を高めるため血統に関する勉強会を実施した。

【まとめ】

今回調査した3農家に対して検討した指導は一部実施中であるが、すべてを履行するには農家の十分な理解を得なければならず、時間が必要となってくる。高齢化や後継者に関する問題はどの農場、どの地域でも起こりうるもしくはすでに起こっていると予想され、多くの農家が今回調査した3農家、つまりは後継者がいない、後継者がいる、後継者の3種に分かれる。農家間での状況の違いはあれど、今回検討した指導方法がそれぞれの基になることから、今後も指導を継続し、得られた経験、成果を指導方法へ還元しながら他へ応用していきたい。